

大賞

ダナモさん

寅間 心閑

東京から津島に越してきたのは三ヶ月前。お正月が明けた頃だった。成人式の日には、本町筋を振袖姿の女の子たちが歩いてきた。綺麗だな。そう思うだけで、不安な気持ちが少し和らいだ。

そう、私は不安だった。知らない土地だから、は理由の半分。もう半分は無計画のせい。二十五歳にしては、ちょっと感情的だったかもしれない。別れた男を追いかけて、私は東京を飛び出した。

秋口に名古屋へ一人旅をした男は、新しい恋を見つけて東京へ帰ってきた。一緒に行けばよかった、と悔やむのも馬鹿らしい。男は良くも悪くも隠し事のできるタイプではなく、十一月になる頃、一方的に別れを切り出された。ごめん、と頭を下げるなんて卑怯なやり口だ。こっちには為す術もない。通い慣れた男の部屋で取り乱してはみたが、結局「また脱皮しちゃったんだな」と納得するしかなかった。

付き合いたての頃、前の恋人について尋ねたり妬いたりする

と、男は「もう覚えてないよ」と面倒くさそうに答えた。もちろん、それでは引き下がれない。手を替え品を替え粘ろうとする私に、「蟬や蛇が脱皮するのと一緒だから」と付け加え、それ以上は取り合ってくれなかった。

後日、「脱皮」という喩えに何人かの女友達が感心し、私もようやく納得できた。成長する為に脱ぎ捨てた皮。そんなものに嫉妬したって仕方ないじゃない、と。

でも実際に自分が「そんなもの」になってみると、話は全然違う。嫉妬さえされない立場だと理解はしているのに、どうしても受け入れることが出来なかった。

すぐにでも名古屋市内に引越すつもりだと、泣きじゃくる私に男は告げた。二十七歳・フリーターのフットワークは軽い。要らなくなった皮は、東京に脱ぎ捨てるつもりだったらしい。隠し事の出来ない男は、悪意がないから残酷だ。

泣きじゃくりながら、私は迷うことなく引越そうと決めた。フリーターなのはお互い様だ。そんな決心に気付かない

男はハンカチを押し付けた。まるで涙の理由が他にあるように、「ほら」と困ったような声で。

ハンカチを受け取ると、優しく頭を撫でられた。一瞬、涙の理由が他にあるような気持ちになり、慌てて「そうじゃない」と思い直す。そんな自分に苛立ち、男にも苛立った。あの時、私の悲しみは変質したのかもしれない。男の匂いがするハンカチに埋めた顔は、ぞつとするほど無表情だったはずだ。

一ヶ月後、津島に三日間滞在して今のアパートを契約した。当然、男には内緒だ。同じ名古屋市内にいなかったのは、脱ぎ捨てられた皮のつまらない意地だったかもしれない。後を追ってきたことを、そして私がそんな女だということを知られたくなかった。あまり近くに住むと、そのうち見つかってしまう――。そう考えるくらいは冷静だった。

名古屋駅まで電車で三十分。そんな条件の中から津島を選んだ。県内以外にも岐阜や桑名など候補地は多数あったが、決めるのに時間はかからなかった。感情的になると、妙な勢いがつくのかもしれない。

私の母親の旧姓は「ツシマ」だ。

津島での初日は慌ただしく、そして寒かった。街にはまだ正月の雰囲気が残っていたことを覚えている。

東京から運ばれてきた荷物を部屋に入れ、ダンボール箱を押

しのけて玄関までの動線をつくり、市役所で諸々の手続きを終える日が暮れていた。一旦家に帰り、初めてシャワーを使う。さすがに料理を作る気にはなれなかったので、財布だけを持って外に出た。

部屋着のスウェットにジーンズを履き、長いダウンコートを羽織る。ラフな格好だから、あまり派手な店には入りたくなかった。けれど引越し初日だから、ラーメン屋やチェーン店の居酒屋ではどこか味気ないし、カフェでは少し物足りない。いや、そもそもお酒を置いていないし……。

一月の寒さに肩をすくめつつ、見慣れない街を歩くこと二十分弱。ようやく、ちょうどいい店を見つけた。

県道を脇に入った道すがら、擦りガラス越しに灯りが漏れている。ただ、中が覗けないので入りづらい。東京だったら、きつと素通りしていただろう。でも思い切って入れたのは、寒さに耐えきれなかったからではない。表のホワイトボードに書かれた「ひとり鍋あります、女性の方歓迎!」という文字のおかげだ。店に入った瞬間、眼鏡が曇る。何も見えないけれど、「いらっしやい」という御主人の声と、美味しそうな匂いにホッとした。それがこの店、現在の職場だ。世の中、何が起るか分かりはしない。

※

居酒屋「悠々」はカウンターだけ、そして常連客だけの小さ

い店だ。五十代の店主夫婦と一人娘で切り盛りしていたが、半年ほど前に娘は大阪へ行ってしまったらしい。

私は彼女の担当だったランチ営業と夜の本営業、そして閉店後の後片付けを任されている。つまり、一日中ずっとだ。引越してきたばかりのフリーターにとつては、本当にありがたい。

ランチは朝十一時から三時間。夜の閉店は夕方四時半。午後九時になると、店主夫婦は店のすぐ裏にある自宅へ帰るので、そこからはドリンクしか注文できない。そして午後十時になると会計を済まして速やかに帰宅——。常連客たちは、このルーをきっちり守っている。呑んでいる時は賑やかな人が多いが、泥酔するような人はいない。

そんな店だから、初めて入ってきた私は質問攻めにあつた。確かに店の外観は観光客向けではない。けれど二年振りの一見客になるとは思ってもみなかった。

東京から引越してきたばかりということ、二十五歳のフリーターだということ、津島、というか愛知県について何も知らないということ……。別れた男の後を追つて、という理由以外は問われるがまま答えたと思う。

その時、隣に座っていたのがダナモさんだ。五十代、六十代ばかりの客の中で、一人だけ群を抜いて若かったのでよく覚えていた。多分三十歳くらい。ずっと瓶ビールを飲み続け、たまにウーロン茶をもらっていた。

店内に音楽はない。テレビが一台、神棚に並んで置かれているだけだ。内心その絶妙な音量に感心していた。誰も喋らなければ音は聞こえるが、誰かが喋り出せば聞こえなくなる。気がけばそんな雰囲気は段々と慣れていった。

料理も美味しい。名古屋っぽくなくてごめんね、と微笑む御主人がすべて作るという。すっかりリラククスした私は、勧められるがまま日本酒を頂いていた。美味しい美味しいと飲み進む私に、ダナモさんは「強いですね」と時折笑いかける。

色白で痩せ型、横顔の印象はインドア派。口数は少ないけれど、周囲の会話に対して時折呟く「そうだな」という言葉が耳に残った。彼の声は柔らかく、耳触りが良い。

何度目かに笑いかけられた時、私はこっそり彼に名前を付けた。それが「ダナモさん」だ。もちろん「そうだな」から取つた。たいした秘密ではないけれど、今日まで誰にも言ったことがない。

居心地の良さにひかれ、私は翌日も「悠々」に顔を出した。いや、その後も定休日の日曜以外は毎日、ランチタイムか本営業、どちらかに顔を出すようになった。

奥さんから店で働かないかと言ってもらったのは半月が過ぎた頃。ランチタイムだった。突然で驚いたけれど、断る理由などあるはずもない。隣で食べていたダナモさんも喜んでくれた。私以外で昼夜とも店に来るのは彼だけだ。いつもシンプルで

カジユアルな格好なので、勝手に自営業だと思っているが本人に尋ねたことはない。あまり知りたくない、というのが本音だ。私がダナモさんについて唯一知っているのは、彼が私の先輩、つまり二年前の一見客だったということだけ。

意識している、という自覚はある。あるけれど、私には東京から引越してきた理由もある。そして、東京から転送されてきた男の年賀状もある。まさか向こうから住所を教えてくださいとは思わなかった。

あけましておめでとうございます／今年もよろしくお願ひいたします

バカみたいだ。抜け殻ってこういうことなんだな、と虚しくなって、初めて涙が出た。

いきなり乗り込んだりはしないけど、一度実際に行ってみよう。住所を知る前はそんな風に意気込んでいたが、いざ知ってしまったと話が別だ。まずは自分が落ち着かないと、と言い訳めいた理由を持ち出し、時間を稼ぐことにした。

津島に来て三ヶ月、「悠々」で働き出して二ヶ月半。もうすっかり春めいてきた。少し、時間を稼ぎ過ぎたような気がする。

※

働き出して二つの変化があった。まずは呼び方。御主人の提案で下の名前、「ミサト」で呼ばれるようになった。ミサトちゃん、なんて呼ばれるのは小学生の時からだ。少し恥ずかしい。

もう一つは、顔。客だった時は、なかなか真正面から顔を見ることも見られることもなかった。どうやら私は「ネコ顔の美人さん」らしい。お愛想だと分かかっていても照れくさい。

ちなみにダナモさんはイヌ顔だった。特に一杯目のビールを飲んだ後、顔をくしゃくしゃにする瞬間がイヌっぽくて私のお気に入りだ。

店主夫婦が大阪にいる娘を訪ねる、という計画は私が働き出した直後からあった。時期は人が一段落する四月の中旬、店は休む予定だった。私は料理を作れない。けれどある晩、常連客たちの少々悪ノリ気味の提案もあり、新人のアルバイトに任せてみようという流れになってしまった。

「まだ私、二ヶ月ですよ」

そう断ってみたが、もう話が決まっていることは雰囲気で見分かる。

当の店主夫婦は満更でもなさそうだし、何よりダナモさんが微笑みながら頷いていた。大丈夫、大丈夫。そんな声が聞こえるようで、何だか心強かった。だから思い切つて覚悟を決め「では頑張ってみます！」と宣言してしまつたのだ。

その日が来た。

朝、名古屋まで一緒に行き、新幹線に乗る店主夫婦を見送つ

た。いつもよりも早く起きたので少し眠い。分かりづらいから、という奥さんの警告どおり、名鉄の乗り場へ戻るのに迷ってしまった。エレベーターに乗ってキョロキョロしながら、ふと名古屋駅で降りるのは初めてだと気付く。

あの男の家まで、歩いて十分弱——。そう浮かんだが、実際に行こうという気持ちにはならなかった。それどころか、思い浮かべた男の顔に違和感がある。本当にこんな顔だったわけ、としっくりこない。けれどその違和感も、電車の中でウトウトするうち散り散りになってしまった。

ランチタイムの準備をしようと店に立ち寄ると、表のホワイトボードに大きく「本日、夜は乾き物のみ！」と書かれていた。御主人の字だ。それを見て思わず笑った時から、私自身もどこか弾んでいたのかもしれない。あつという間に時間が過ぎていた。夕方四時半。開店と同時にカウンターは全席埋まってしまったので、補助の椅子を三脚全部出したがそれでも足りず、一時は立ち飲みをもらう程の盛況だった。普段カウンターだけで足りているのが嘘みたいだ。

スルメ、柿ピー、缶詰。いつもとは比べようもない簡単なつまみだが、みんないつもと同じく楽しくそうに飲んでいる。ダナモさんは一番乗りだった。カウンターの一番奥でスルメ片手にビールを飲みながら、たまに「そうだなも」と呟いている。やっ

ぱり彼はイヌ顔だ。

それにしても混んでいる。火も使っていないのに店内は明らかに暑い。暖房を消したがそれでも追いつかず、冷房に切り替えてもみんなの顔は汗ばんでいた。

「ミサトちゃんの人徳だがね」

みんなのお愛想を真に受けたわけではないが、こんなに短期間で居場所が出来た幸運を密かに噛みしめていた。

この三ヶ月間、新しい生活に慣れようと精一杯で、追いかけてきた男について思い悩む暇はあまりなかった。今朝みたいたことが何度か続くうち、完璧に彼の顔を忘れてしまうのだろうか。もしかしたら私は脱皮したのかもしれない。

「のお、ミサトちゃんの人徳だがね？」

そんな声に、ダナモさんはいつもより大きな声で「そうだなも」と応じている。

あつという間に九時になった。ようやくカウンター席だけで間に合うようになり、溜まっていた洗い物を片付けようとした瞬間、みんなが「じゃあ、お会計」と帰り支度を始めた。

一時間早いけど……。そんな顔をしているのは私だけではない。ダナモさんもだ。呆気にとられた若輩者二人をからかうように「ええから、ええから」とみんな会計を済ましては席を立つ。いや、ただ席を立つだけでなく、ダナモさんのことを私

に教えてくれる。

私と同じく元々は東京に住んでいたこと、個別指導の学習塾で先生をしていること、私が働くようになってから店に来る回数が増えたこと……。ダナモさんは否定するでもなく、瓶ビールを呑んでいる。少し顔が赤い。

そして常連客たちは、今度二人で天王川公園へ行くように、と勧めてきた。そろそろ「藤まつり」が開催されるという。立派な藤棚が夜はライトアップされて綺麗だからと口を揃え、日曜ならこの店も休みだから、と提案してくれる。急な展開に「いや、でも……」と慌てる私に、「おやすみ！」と笑いながら手を振り、とうとう全員帰ってしまった。

店には私とダナモさんだけ。どうやら人生の先輩方が示し合せ、気を回してくれたらしい。

疲れたので洗い物は明日にしようかな、と私の方から口を開いた。多分この人はルールを守って十時には帰る。もっと話があった。

「塾の先生だったんですね。知らなかった」

「まあ、うん」

「あと東京からって」

「ええ……」

ちよつと表情が曇った気がした。慌てて「実は私……」と、誰

にも言っていない津島に来た理由を伝える。

少し前に男と別れたこと、彼は新しい女が住む名古屋市内に引っ越してきたこと、その後を追いかけて来たが、同じ市内ではストーカーみたいだから津島市に住み始めたこと。

「……こんな話、ひきますよね？」

そうだなも、と言うかと思ったが「いや、全然」と彼は微笑んだ。さっきの少し曇った表情が浮かぶ。実はダナモさんも、私みたいな理由で津島に来たのかもしれない。

互いにその後は何も話さなかった。テレビから流れてくるニュースを聞きながら、彼は一度だけウーロン茶を注文した。私から「藤まつり」の話は、やっぱりできなかった。それは何となく怖い。

十時になる少し前に、ダナモさんはお会計を済ませた。席を立つ寸前、残っていたウーロン茶をぐいっと飲み干し、「ミサトさん」と私の名前を初めて呼んだ。驚いて、うまく声が出ない。「あの、藤まつり、天王川公園の……。一緒に行ってもらえませんか？」

そうだなも、と言えはよかったのだが、慌てた私は妙に大きな声で「はい！」と返してしまった。

顔をくしゃくしゃにして笑っている彼は、やっぱりイヌ顔だ。

(了)